

久米島下地原洞収集の鍬先について

上江洲 均*

昭和54年の春、久米島具志川村字具志川の下地原洞へ鹿化石調査を行った大城逸朗学芸員が、おもしろいタイプの鍬先を拾って来た。それを預って一年にもなるが、まだ本格的な調査研究をすすめていない。このまま棄ておくわけにもいかず、通り一遍の資料紹介だけでもしておこうと考え、筆を取ることにした。

(一)

今年に入って間もなく、久米島へ行く機会があって、外間館長、名嘉副館長、大城学芸員、具志川村教育委員会の宮里君、それに下地原洞に詳しい久手堅稔君と筆者の総勢6人で洞穴を見に行つた。

洞穴の入口は風葬所になっており、その一角に出口があるが、ふだんは大きな石を置いているので、それと気がつかない。大城学芸員と久手堅君、筆者の3人で洞穴内の探索をすることになり、仰向けに寝た状態で入口から滑り下りるとそこには真暗な空間があった。『沖縄県洞穴実態調査報告書Ⅱ』(1979)によると、ここは、幅20m、奥行30m、天井の高さ6mの大広間である。洞穴全体の規模は、全長凡そ185m、幅平均10m、天井の高さ約8mの大型洞穴である。

入って右手からは、鹿化石が多数出土したそうである。正面は、はるか奥まで続き、もう一つの出口があるが、少し行くと10m余の落差があり、しかも泥が深く先へ容易に進むことはできない。左側の洞壁に岩の小さな庇があって、そこに例の鍬先が置かれていたのである。他にモリらしいのを残して来たとのことで、そのことも実は気がかりであった。

庇のところまで行って見ると、2つのモリ先が置かれていた。かなり錆びているが、モリの原形はとどめている。鍬先とともに木で取りつけたはずの柄は見当らない。庇は柄のついたまま置ける広さではなく、最初から鉄の部分だけを置いたものと思われる。

ここは住居跡だったのか、正面の広場は全面灰土である。少し歩き回ると土器の大型片が見つかって。2個分のうち1個分は、その半分までが天井から落ちた石灰分を含んだ水滴に当り、石筍化

している。それで拾うのをあきらめ、そのままにしておいた。奥の岩の割れ目には炭化米があるそうだが、筆者はそこを見ていない。

その帰り道、久手堅君の自宅に寄って、収集資料を見せてもらい、同洞穴より収集の炭化米の寄贈受けた。その時、この洞穴から収集したという斧の刃を託され



写真1 厨子甕の置かれた洞穴入口附近

(* うえづひとし 県立博物館学芸員)

た。これは現在も残る沖縄斧の刃で、片側が開いた台木差込口のあるタイプのものである。現在のものよりやや小型で、保存状態はきわめて悪く、大鎌でいくつかにひび割れが生じている。しかし、まぎれもなく斧の刃である。同洞穴広間の右よりのところにある石の上にあったという。

この三つの鉄器は、同時代と見てよいと思うが、その時代推定が実は困難なことである。表面採集のできる土器片や炭化米と同時代と考えるのか、あるいは別と考えるべきか。

この洞穴にも一つの疑問点はある。それは、戦時中のごく短期間、避難民が入ったことがあったと言われ、その時のかく乱が気になるところであるし、三つの鉄器もこの時代に結びつけて考えられないこともない。しかし、避難期間も短く、しかも多勢ではなかったようであり、広間の土器の状況から考えても洞穴全体の保存状態はよい方だと判断される。また、鍬先や鉄斧の形態から見て、新しい物とも思えない。避難民とは関係がないと考える。

(二)

この洞穴については、前掲『実態調査報告書』に詳しいが、時代的にヤジヤーガマと同系列とするならば、グシク時代の遺跡ということになる。このことは、安里進氏のヤジヤーガマ遺跡の調査報告に詳しいが(『沖縄県立博物館紀要』1号、1975年)、その表面調査による収集品(土器、炭化米)などとかなり似た要素を持つように思われる。

安里氏の紹介した資料の中に、鉄斧刃が一つある。いわゆるユーチ(ヨキ)のことである。図で見るかぎり、現在のものに寸分の違いもないようと思われる。後世のものではないかと考えるが、これまた確たる証拠はない。

報告書の中には、土鍋が出てくる。これは後代まで使われたらしく、1477年の朝鮮漂流民の見た与那国島の土鍋の描写にも似ている(『李朝実録』)。実録にも斧の描写は出てくるが、それについて詳しく知ることはできない。ヤジヤーガマ収集のヨキが古いのか、下地原洞収集の斧が古いタイプなのか、今のところはっきりした決め手はない。ただ、後者が、沖縄的特色を持つ斧といえるよう思う。

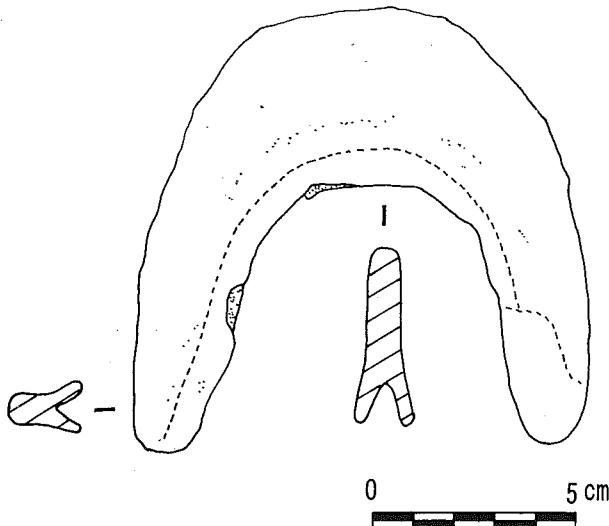


図1 下地原洞収集の鍬先実測図

『李朝実録』の中に「らいし耒耜しようそうは造らず、小鍤こくちを用いる」とある。耒耜は水田耕作に欠かせない鋤である。諸橋大漢和辞典によると、耒耜は「木を曲げた手持ちのスキ」の意で、耜はスキの刃、耒は耜の柄の意だという。図を見ると一本の木で柄と鉄刃をはめる台木をつくり、その先に帽子のツバのような刃先がついたものである。

ところが、明代の『天工開物』という本の挿絵を見ると、耒耜は

牛にひかせるスキである。本来人力で使った鋤から畜力による犁へ移ったのだろうか。

牛耕用犁は、沖縄諸島でも使われて来たが、鋤は入って来なかつたものか、あるいは入つたが、その後長くは残らなかつたものか、見ることができない。

小鍤は小さなスキの意であるが、これは沖縄でいうヘラであろう。ヘラは、古記録には辞典にもない「鉢」を当てて來たが、よく形を表わした文字であるといえよう。腰をかがめて除草をする農具である。犁または鋤、あるいは鍤の農耕文化ではなく、ヘラの文化といえる。

与那国島の例をそのまま久米島に持って來て考察することは、いろいろ問題も多かろうと思うが、道具や生活状態にそう大きな変化はなかったと考えられるので、多少の参考にはなろう。ここで問題になるのは、下地原洞収集の鍤先の年代である。これは前述の通り、グシク時代ないし、後世のものと考えられる。この大事な問題は、残念ながら研究不十分のため、しばらくおかねばならない。

筆者は、もう一つの問題点を持っている。それはこの鍤先が、久米島だけに残る水田鍤とどう関わるかということについてである。本土各県では、台木の先に鉄刃をつけた鋤や鍤は現在でも見られるが、沖縄では久米島以外に見られない。

(三)

久米島に残るこの鍤は、具志川村でミングエー、仲里村でマーグエーといつてゐる。もっぱら水田用で、広い刃先に台木を差しこみ、柄の後方に又木の支えをついているもので、一般の平鍤より能率がよいので、重宝であった。これは戦後の一時期まで用いたが、スコップ改造鍤に駆逐され、さらに稻作からキビ作へ移った段階で完全に姿を消した。

マーグエーという名称は、マカヤ(真茅)、マーグ(真籠)、マージン(真黍)等と似て、本物の鍤、あるいは本来的な鍤という響きがある。しかし、ミングエーはどうも「新しく入った鍤」の語感がある。あるいは国頭村安田の例であるが、水田のことをミンタといい、水田用鍤のことをミンタウチグエーといつて、「ミン」はミンタのつまつた語とも取れる。また、伊平屋で平鍤の畑用をウングエーといい、これに対し、水田用の幅の広い平鍤をミングエーと呼ぶから、これと同系統とも考えられる。この場合のウンは雄、ミンは雌の語感がある。

刃先のツバ状半月形の内側にミゾを設け、そこへ重みのある台木(デー)をはめこむ。台木の中心に穴を四角にあけ、そこへ柄を通す。柄の下方は、柄の一部を削り残してひっかかりとする。台木は、椎の木の地上へ浮き出た板根や、松材、杉材を使った。仲原善秀氏の話によると、サキシマスオウの板根を切り取って使い、木を枯らした事例がしばしばあったとのことである。

この鍤に似たものは、奄美もある。刃先は一般に角ばっており、台木を差し込むミゾも角ばっている。柄の後方には一本の支柱をついている点もやや似ている。笠利町資料館には畑用の鍤先があるが、これをトーゲといつてゐる。トーゲは、沖縄ではトンゲエーといつて、「トー」は平ら意味にも取れるし、「唐鍤」の意にも受取れる。この形式の鍤はのちに鉄だけの平鍤に變る。これは奄美の場合の水田鍤「トチムン」(田打ち物の意)のちには鉄刃の「ヒルバ」(広刃)に變る。

筆者は、従来このマーグエー(ミングエー)を新来のものと考え、鉄刃のトンゲエーの後に入つたものと考えて來た。しかし、下地原洞の鍤先が、とにかく数百年の古さを持つとするならば、この奄美の事例とも考え方を修正しなければならないだろう。仮りに下地原洞の鍤先が新しいとしても、類似鍤の発見であり、横の広がりが出たということで、発見の意義は大き

いと考える。

(四)

ところで、明治10年に催された国内勧業博覧会の『出品目録』を見ると、琉球藩出品目録の中に鋤、ハツ刃(木製)、石鍬、真鍬(木)、刃鍬、鉢、埋鉢、手キコ、鎌の名がある。鋤はおそらく、牛耕用の犁であろうし、ハツ刃は馬鍬、石鍬は開墾用の先の尖った鉄鍬、刃鍬は刃幅の広いわゆるトングエー、鉢は畑で除草等に使う小農具、埋鉢は水田用の木製のウズンビーラ、手キコは木製の除草、芋苗植付用のティブクであろう。ところが問題は「真鍬」である。木製ということから考えて、久米島にのこるマーグエー(ミングエー)と同一物と考えてよいだろうか。もしそうだとすれば、久米島だけでなく、この種の鍬が那覇周辺にも使われていたことになる。

そう考えながら、明治6年の『琉球藩雑記』(沖縄県史14)を見ると、農具概略図があり、前記の博覧会出品目録に記載された農具9点が、図として出ている。やはり鋤と記載されたのは犁であり、他のものも説明を加えた通りであるが、「真鍬」は先に鉄のない木製の鍬である。久米島のマーグエーの横のつながりも再び暗礁にのし上げてしまった感じである。

しかし、逆に本島になかったと仮定すれば、久米島だけにどうして発達し、使用されて来たのか興味のわくところである。これらの鍬先が本土とのつながりなのか、中国系なのかこれまたはっきりしないが、下地洞収集鍬先とマーグエー(ミングエー)の間には、かなり緊密なつながりがあつただろうことだけは想像できる。



写真2 下地原洞収集の鍬先

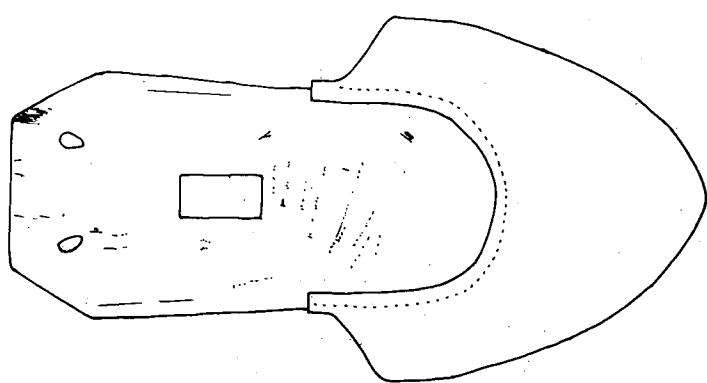
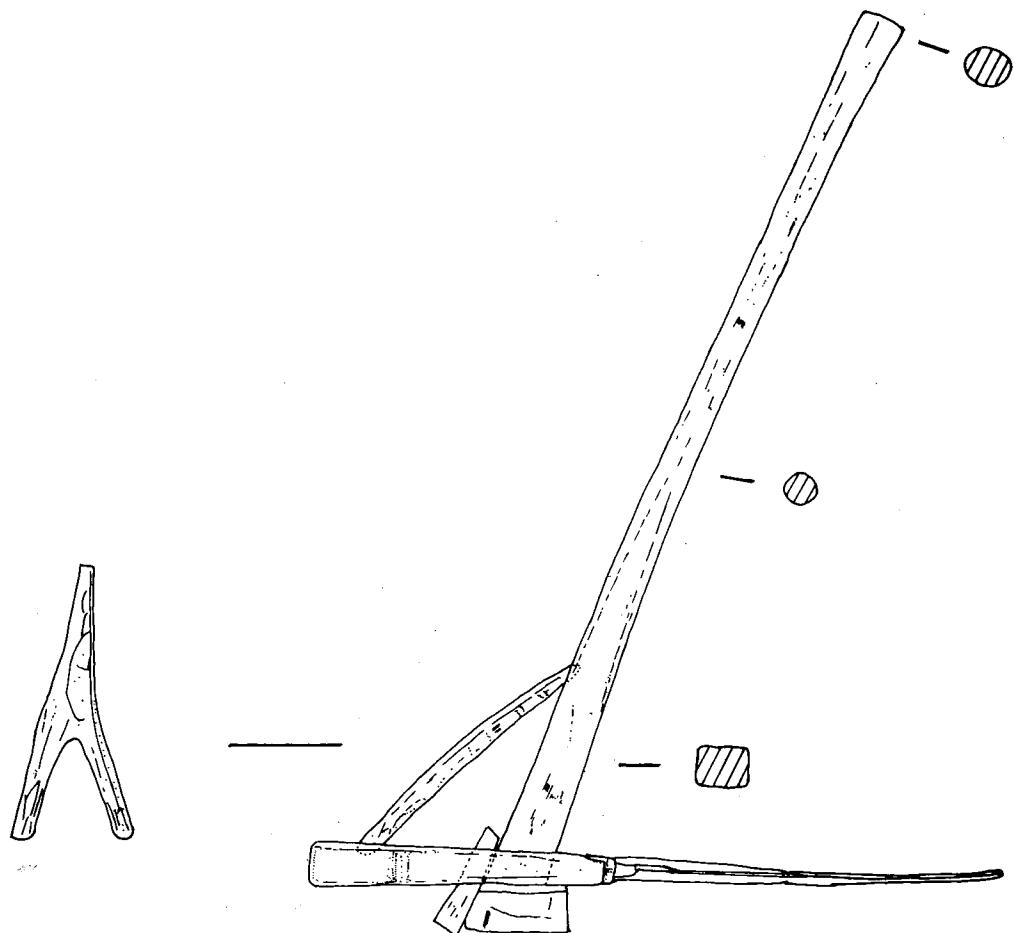


図2 マーグェー（ミングュ－）実測図

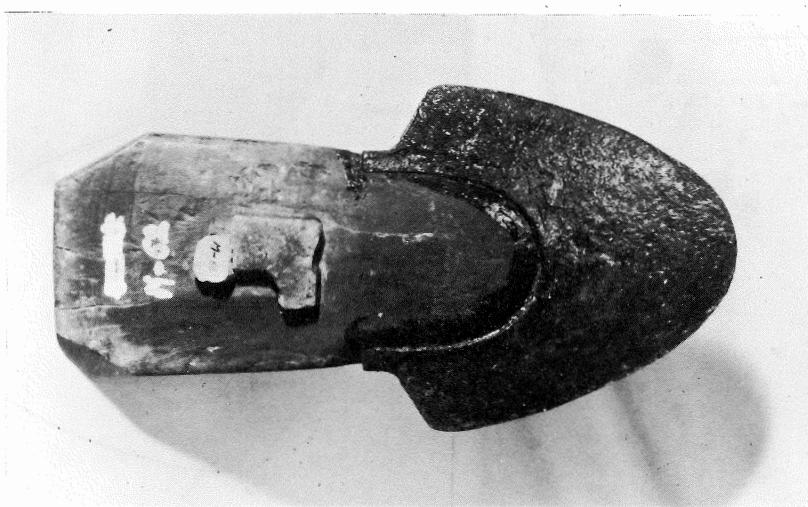


写真3 マーグエー (ミングエー)